2023年(令和5年)度

特定非営利活動法人リフ超学校

事業報告書

総括

（事業年度：2023年4月3日～2024年3月31日）

団体として11年目、特定非営利活動法人(NPO法人)として1年目の事業を実施、完了した。事業内容自体は任意団体時代から大きく変わることなく、定款の示すとおり。

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業

2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う教育事業

3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業

4. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

を実施している。いずれもミッション「地域で活きる人材を育成する。」「正直者がバカを見ない地域社会を実現する。」に基づき宮城県利府町内において町民及び各主体の自己実現という角度から地域の活性化を目指すものであり、またそのような仕組みや機会が町内で多く見られないため、これを地域課題として先進的に行っている。しかし、医療や貧困課題のような活動分野のように、今日・明日に誰かの命が失われるような緊急性の高い課題ではないため、地域課題としての認識、周知に相当の創意工夫が必要であり、素早い広がりを見せることは依然として容易ではない。

しかしながら、今年度より団体をNPO法人とし、これまでと異なる社会的責任や信用を負い、また関わる人材も増えているため、ゆるやかではあるがミッション達成への歩みは進んでいる。

今年度、最も課題としたのは「企業セクターとのネットワーク」であった。特にインターンシップ事業でのプログラム開発に進捗を見いだせなかったことや、イベントの会場選定にて民営(企業)の施設を検討した際、信頼関係を築く時間が不足し「企業セクターとのネットワーク」の弱さがあらわになった。

一方で高等教育機関からの相談や問い合わせ等、法人へのアプローチがあり、教育機関とのネットワークや信頼関係は構築され始めつつある。また、行政からも市民活動・NPO活動に関する専門的な相談を受けることが増えてきた。

事業報告

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業

（１）利府町市民活動研究会

【趣旨】

2023年現在利府町内では市民活動やNPOの中間支援なる仕組みを公的に有していない。これにより市民協働のまちづくりが停滞する部分を促進に転換させるべく、2021年度から本事業を行い、現在の町内外活動者/潜在活動者のコミュニティを運営し、情報交換や合同研修、ケース検討の場として、本来のそれぞれの団体活動運営の一助と位置づけ、将来的に行政や企業等他セクターを巻き込んだ協働のまちづくり目指している。

【実施結果】

今年度も、市民活動研究会は隔月による対面でのケースワークと業務共有ツール「Slack」を用いたオンラインコミュニティ(団体間の日頃の情報交換や親睦、リソース共有を果たす機能)を並行した。また今年度からの長期目標として、これまで利府町内で公的に有していなかった市民活動促進や市民協働促進の指針・ガイドラインの提案書に値する共通認識明文化の策定を示した。対面でのケースワーク内容は下表のとおり。

実施日	実施場所	参加人数	内容
5月16日	利府町文化交流センターリフノス	11	テーマ「市民活動情勢Ｉ」 他の先進自治体で定められている市民活動支援や市民協働によるまちづくりへの共通認識(指針)を各市町村から集め、自由に閲覧しながら感想やそのような共通認識を定める意義をディスカッションした。 参加した市民活動実践者の総意として、自分たち活動者にとっても公益にとっても指針等の共通認識を定めることは大事だという確認が出来た。

7月18日	利府町文化交流センターリフノス	12	テーマ「行政との協働Ⅱ」 他市より行政職員を話題提供者として招き、行政と市民活動の協働事例やコミュニケーションの秘訣を聞いた。その後、グループディスカッションにて利府町内における町民(市民活動団体)と行政とのコミュニケーションのあり方を語った。結論として、町民(市民活動団体)と行政とのコミュニケーションのあり方として「イベントをしたい」等困った時だけではなく、常日頃から(用事がなくても)お互いにコミュニケーションを心がける必要がある総意があわらになった。
9月19日	利府町文化交流センターリフノス	13	テーマ「インターン生企画」 夏期休業を活用した１カ月間のインターンシップとして市民活動研究会の運営に携わった大学生によるケースワーク。「『梨』を使わないという条件で観光客誘致や若者の転出抑制、経済活性化になるイベントを考えよう」というワークを学生が企画立案し、当日運営まで行った。結果、利府＝梨という通り一遍倒ではなくさまざまなアイディアが(実現難易度は今回度外視するとして)ディスカッションから生まれた。
11月28日	利府町文化交流センターリフノス	8	テーマ「ケース検討会Ⅱ」 ケースの持込者、(一社)タンコーカナリの石井宏之氏とともに、「廃材活用と市民活動」についてディスカッションを行った。石井氏が個人的に収集しているコーヒーの豆粕の活用を導入に町内でどのような廃材活用、環境配慮に関する活動を行えるか話し合った。さまざまな活用物、活用法とともに課題やハードルが発声することもわかった。また、廃材の排出する側と活用したい側のマッチングを機能させる中間支援の必要性も議論の中で挙がっていた。そして「そもそも捨てることを前提にものを作らない」という意見もあった。
1月16日	利府町文化交流センターリフノス	4	テーマ「市民活動情勢Ⅱ」 他の先進自治体で定められている市民活動支援や市民協働によるまちづくりへの共通認識(指針)を各市町村から集め、この日はそれらの構成や目次のみに着目して検分を行った。同時に、本事業の目標として掲げている『利府町での「市民活動促進」「市民協働社会実現」を地域のみんなで理解し推進する一定の共通認識を明文化するための原案書』の目次も模擬的に作成した。
3月19日	利府町文化交流センターリフノス	9	テーマ「市民・企業・行政の協働Ⅰ～災害時の協働～」 1月16日に作成した目次から「<第4章> 市民・行政・企業~地域のなかでの役割~ 2. 有事の際の役割 」をテーマとした。本年元旦早々に能登地方で痛ましい災害があったことと、3月が宮城県民にとって東日本大震災を省みる時期でもあることも由来した。防災士に利府町で起こり得る大災害をシミュレート提示していただきその緊急事態下で「どんな困りごとが起こるか」「それに対し、市民・行政・企業がどう協働するか」をディスカッションし。緊急時の協働の認識を共有したほか、そのような時が訪れた場合の備えとした。

（２）利府町寺子屋

　2022年度の市民活動研究会にて「ケース検討会」を行い、集会所の利活用やこどもの居場所づくり、多団体協働プロジェクトという複合した趣旨をもって発足したモデルケース。昨年度から準備を重ね、2022年度2月より集会所等を用いた居場所づくり活動を行っている。

【実施結果】

実施日	実施場所	参加人数	内容
4月23日	野中一部公民館	6	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、
6月17日	野中一部公民館	5	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、父の日にちなんで近隣にすむボランティアさんの持ち込み企画でフラワーアレンジメントのワークショップを行った。
7月22日	森郷森林組合事務所	13	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。休憩時間に他団体である「じぞうあん」の協力を得て、かき氷の提供をこどもたちに行った。後半は、工作や知育玩具等で自由に遊ぶ時間を過ごした。
9月16日	森郷森林組合事務所	8	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、10月9日に開催される利府町の大規模イベント「ALL RIFU 産業祭」の出展機会を得たため、こどもたちがどのような模擬店を当日に運営するか、話し合いをしたり試作品を作ったりした。
10月9日	利府町文化交流センターリフノス	3	利府町の大規模イベント「ALL RIFU 産業祭」の出展機会を得たため、普段寺子屋に通っているこどもたちが会場内で模擬店を運営した。 こどもたちは割り箸鉄砲による射的コーナーと、6月に行ったフラワーアレンジメントを今度は”教える側”となり、店舗運営、来客対応を体験した。利府町としても年間事業のなかで30年以上続き、なおかつトップクラスに規模の大きい催事だったため、寺子屋ブースにはおよそ__名の来客があった。
11月11日	野中一部公民館	-	（利府第三小学校学区内にてインフルエンザが感染拡大し、中止。）
12月19日	森郷森林組合事務所	13	前半は他の月と同様、大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半はパンケーキづくりのプログラムを、調理、デコレーション、試食まで行った。会場が公園に近接してるため、急遽公園での外遊びも行い、こどもたちと運営ボランティアが相互交流しながら遊具やごっこ遊びを行った。
1月21日	森郷森林組合事務所	10	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、地域のママさん方のボランティアによるスライムづくり教室を行った。
2月17日	森郷森林組合事務所	-	(町内小学校学区の複数にてインフルエンザが感染拡大し、中止。）
3月17日	森郷森林組合事務所	11	前半は他の月と同様、大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半はボランティアメンバーから提供のあった白菜について「はくさいのおはなし＋くいず」そしてその白菜を活用したお好み焼きづくりと実食(ランチタイム)を行った。 これまで白菜が嫌いだった児童がみんなで一緒に食べることでこれを初めて食べることが出来たという事例も見られた。

【特記】

プロジェクトそのものを多団体協働として立ち上げたため、第一義的なこどもの居場所づくりとしての機能も果たしているが、この寺子屋活動自体が地域の活動者または潜在活動者のハブとして二次的な効果を生み出しており、協力団体として現場に関わる団体や個人

ボランティア、またはそのような(寺子屋に関わりたい旨の)相談が増えてきている。今後もこどもの居場所を堅実に提供しつつ根幹であった市民活動における調査研究も継続したい。参加児童側に関しては今年度より参加できる小学校学区の制約を受けない森郷森林組合の併用も始めたため、昨年度のプロジェクト立ち上げ時に対象と制限した利府第三小学校から他の小学校への認知が広がり、また広報物の全児童配布の許可を得れる学校も増えてきている。

またこの活動費は参加児童から徴収する参加費や団体の原資のほか、町民や他団体からの寄付金、イオングループ「黄色いレシートキャンペーン」の助成、「公益信託仙台銀行まちづくり基金」の助成を受けながら活動を継続している。

2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業

（１）リフ超学校インターンシップ

【趣旨】

宮城県利府町では地域課題として若者(18歳～20代)の転出意向が顕著であり、行政、企業その他地域一般では若者を既存の各主体の組織や事業に”呼び込む””巻き込む”ことに重きを置いている。対して当団体では、”呼び込み””巻き込み”の前提として若者が「学ぶ」「遊ぶ」「働く」「住む」「集う」という「受け皿」が必要と考えている。そのために2019年度は若者同士の20代交流会を実施し、2020年度のコロナ禍以降、「集う」ことが困難な状況下になってからは、若者(特に学生)ひとりひとりの内省を支える伴走を行うため、「働く」の支援としてリフ超学校インターンシップを行っている。学校の求人票や大手求人サイトには掲載されないような地域性に富んだ事業所から協力を得て、1日ないし数ヶ月のインターンシッププログラムを実践することにより、生きることを哲学的に考える一助として機会を提供している。

【実施結果】

今年度は、上述の総括にて示したとおり、「企業セクターとのネットワーク」構築が難航しプログラム開発が乏しかったため、例年より少ない件数となった。

プログラム件数：1

実施期間	実施者	受入事業所	コーディネーター	内容
8月16日 -9月25日	大学2年生 (兵庫県)	NPO法人リフ超学校	NPO法人リフ超学校	● リフ超学校事業「市民活動研究会」の運営インターンとして、対面のケースワーク1回を企画立案から当日運営までを実施。

（２）キャリア相談

相談件数：3件

相談者層：大学生

相談概要：卒業の進路選択について、地域や社会や仕事を少しでも体験できる機会について、学校生活の活用法について。

3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業

（１）RIFU ROCK FEST.

【趣旨】

利府町は近年の行政セクターと企業セクターのサービス拡充が飛躍的であるが、市民との関わりにおいてはサービスの提供者と享受する側との二極化が進むという側面があり、次の時代で市民協働のまちづくりを実現するにあたり、市民ひとりひとりが社会との関わりや自己実現を目指す主体性を育む必要がある。また主体的に社会活動や文化芸術活動に勤しむ市民の努力が露見される機会が多く必要であるため、当団体では2017年度より、その市民の努力を露見する場として、特に「音楽×まちの賑わい」という観点から本事業を行ってきた。年度ごとに多様な個人・団体が実行委員として活躍しており、その層も学生や教育関係者、市民活動・文化活動実践者、その他一般の町民と多岐に渡っている。

その中で、本事業は

1. コロナ禍の長期化において失われた対面での人材交流の機会を創出すること

2. 利府町を文化活動、社会活動、経済活動の各領域において、だれもがはじめの一歩を踏み出せるチャレンジングな地域へと社会変革するため、この3領域のチャレンジャーに

対して自己表現、自己実現の機会を創出するとともに、特に若い世代の自己肯定感、自己重要感の醸成すること

を目指す。

【実施結果】
昨年同様、本事業(イベント)に対して企画運営を行う実行委員の募集から事業が始まった。昨年と同じく、町民のイベントやサービスに対する主体性(能動性)を育むため「5名以上実行委員希望者が現れなければイベント自体を実施しない」という制約を設け10月1日から同月末10月31日までに8名の実行委員が集った。8名中4名が昨年度からの継続参加だった。昨年度は11名の実行委員に対し実行委員組織のマネージメントの負担も多く、部分的な機能不全も見られたため、今年度は実行委員組織の組織改編も試みた。
会場選定は例年に等しく難航し、今年度は特に若者のロックバンドのサウンドにも耐えうる会場を探した。候補ををいくつか絞った経緯の中で各施設との相談に移るが、施設を持つ企業と実行委員会(市民)のセクターをまたいだコミュニケーションや文化の相違などから交渉が難航するなど、新しい課題発見等も経て最終的には利府町総合体育館サブアリーナとなった。
実行委員会は＜音楽＞＜フロア＞＜広報＞のチーム制とし、基本的にはチームごとに日々の準備活動を行った。月に1回の全体ミーティングでそれぞれの企画運営担当箇所の進捗や他のチームへの協力要請等を行った。
音楽チームは、かねてからの周囲からのニーズ「若者や地元の人を増やしてほしい」という声に応えるため、出演者をカテゴライズし、若者に出演権のある「U-20枠」、地元の文化活動者に出演権のある「地域枠」、その他誰でも参加ができる「一般枠」を設置した。
フロアチームは会場規模と当日のシミュレーションを綿密に行い、従来まで10組募集していた出展者(ライブ会場を物販、ワークショップ、展示等で彩るブース)を20組に拡大し、募集を行った。広報チームは効果的なチラシ活用を行い、メインビジュアルは地元の高校生が描きテキスト入れはプロの編集者が行うという合作にチャレンジした。またSNS発信においてもそれを専業とする実行委員に担っていただくなど、各チームの実行委員(市民ボランティア)の創意工夫が見られた。また出演者に「U-20枠」という若者の参加を促進させたほか、前出のチラシ作成や当日ボランティアとして星槎国際高等学校仙台学習センターを中心とする高校生らが司会や音響アシスタント受付、装飾等で活躍し、学生の活躍も目立

た。
当日の場内の様子は前述の出演者・出展者で賑わい、昨年度比として目視のみでもわかるほど多くの来場者で賑わった。広い会場を使用したことで単純な出演者・出店者のPRのみならず、実行委員、当日ボランティア、来場者まですべての属性が群像劇的に相互交流し、ネットワークづくりを行い、新年度の自活動がステップアップするための足がかりとしていた。

RIFU ROCK FEST.2023			
実施日	実施場所	参加者数	内容
3月30日	利府町総合体育館 サブアリーナ	実行委員 8名 当日のみのボランティア 19名 出演者 10組_名 出展者 20組20名 協力者 1社2名 当日来場者 約300名	● 若者が演奏する「U-20枠」、地元のバンドやアーティストが演奏する「地域枠」、その他誰でも参加できる「一般枠」の演奏者によるライブ演奏10組。 ● ライブ演奏を体育館の広い空間を使って彩る物販・ワークショップ・展示・等の出展者20組。

3. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

（１）各種情報発信

【実施結果】
ホームページ、SNS、紙チラシを活用し、年間を通して、自団体の活動のお知らせ、参加

者募集や各イベント・プロジェクトの実施結果や分析をレポートした。新しいステークホルダーの獲得、各事業や市民活動そのものへの参画や事例の周知として機能させた。
また、SNSを活用し町内で活動する他団体の活動現場に赴き、その様子を発信した。町内各所に周知することはもちろん、NPOの公的中間支援のない町として、その町内でも市民活動が存在することを町外、県外に周知するための機能とした。
8月27日(日)は利府町議会議員の一般選挙があり、非公式の選挙特番「ていげん!!」をインターネットライブ配信した。インターネット配信サイトにて町議会議員選挙の開票速報や候補者紹介、一般町民としての暮らしの感覚や地域課題、政策についての語らいを配信者とリスナーがコミュニケーションできる形で行い、町議会で行われていることが特権階級の限られた人たちの場ではなく、私達ひとりひとりの暮らしの困りごとや創意工夫が少し難しい言葉と形式になっているだけなのだと主張した。

利府町非公式選挙特番「ていげん!!」			
実施日	実施場所	視聴者数	内容
8月27日	オンライン	約410	● 町議会議員選挙の候補者紹介、開票速報 ● 一般町民としての暮らしの感覚や地域課題、政策についての語らい

（２）各種相談

【実施結果】

　他団体や個人活動者、潜在的な市民活動者からの活動相談や受益者の相談、および当団体が市民のだれもが参加できるプロジェクトとして稼働させているものへの参加希望の相談、受益者からの相談、行政や公共施設指定管理者、企業等からも市民(団体)と関わるための相談が寄せられた。また、『地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業』と連動する学生や若者からのキャリア相談、学生生活や人間関係の相談も寄せられた。相談件数は計26件あった。
　相談に対し代表や理事を中心とした当団体スタッフが対応し、助言や適切な主体へのマッチング等を行った。

相談件数：29件31名
相談者層：学生、市民活動団体(もしくは個人活動者)、行政、企業、受益者
相談概要：市民活動運営相談、他セクターと市民との協働についての相談、他セクターか

ら見た市民活動の定義・意義に関する相談。受益者からの日々の困り毎。学生の卒業の進路選択について、地域や社会や仕事を少しでも体験できる機会について、学校生活の活用法についての相談など。

（３）懇親事業

【実施結果】

今年度に当団体が任意団体からNPO法人として新たなスタートを切ったことで、会員も増え、前年度12月20日設立総会以来に一同に会する機会を持てなかったため、会員内外の懇親を図るため「渾身の懇親会」と称したバーベキュー会を行った。

渾身の懇親会			
実施日	実施場所	参加者数	内容
6月10日	加瀬沼公園	10	法人会員内外の懇親を図る機会の創出

以上。